

第14回行徳湿地再整備に係るワーキンググループ議事録 開催結果（議事概要）

1. 日時

平成25年1月8日（火） 18:05～20:45

2. 場所

行徳公民館 第2研修室

3. 出席者（順不同、敬称略）

磯部 雅彦	東京大学大学院・新領域創成学科研究科教授
蓮尾 純子	行徳内陸性湿地再整備検討協議会委員有志
林 浩二	〃
東 良一	〃
風呂田 利夫	東邦大学理学部・大学院理学研究科教授
後藤 隆	住民有志
森川 泰和	市川市行徳支所長次長（市川市行徳支所長代理）

4. 一般参加者

10名

5. 議事

議題1 行徳湿地の将来像の検討について

（資料1及び参考資料により事務局から説明）

（事務局）

「参考資料1-1 行徳湿地の将来像の進め方（案）」ですが、前回のワーキングでも話しましたが、昨年度の協議会の中で、検討項目の10項目のうち、6番までの検討項目については協議会の中で確認されました。

今年度は目標として、7番、8番、この2つの項目につきまして検討していくように考えています。今日のワーキングは、7番の行徳湿地の目標に向けた検討項目・優先順位の検討の中で、「参考資料1-4 行徳湿地の特徴的な機能を高めるための施策実施に向けて」の2番の『利用を図る上での特徴的な機能の“目標達成のための施策”及び“問題点”と“対応案”の検討』という表があります。表の項目毎にあります施策実行にかかる問題点、問題点に対する対応案を今回のワーキングで埋めていくような形を考えています。

事務局の提案として、施策実行に係る問題点をピックアップすることによって、問題点に対する対応案が見つかります。対応案が見つかり、それにより検討項目、優先順位というのが見えてくるのではないかと考えています。

もう一点は、昨年度の協議会で話のあった、行徳湿地をエコミュージアムとして活用していくのはどうかということで、参考資料1-6と、林委員から提供頂いたA4、1枚の資料を添付しています。今日は、前回のワーキングの中でもう少し話したかった行徳湿地を広く活用するためには、市民の意見聴取が必要ではないかという点について、意見聴取の方法を再度、皆様から意見を伺い、方法を決めていきたいと思っています。

（東）

意見聴取の方法について。ここから入りましょう。前回、いろいろ話に出たのは、1つは確か青年会

議所を巻き込めないかという話。もう1つは、学校関係者を巻き込めないかという話。それから、もう1つ、風呂田委員から市川市でやっているまちづくり懇談会というのがあるのでこの場が使えないだろうか。この3つぐらいだった気がするんですけど、他にありましたか。

(風呂田)

あと実際に利用者からの意見ももらう。

中に入ったとか、あるいは見たとかという時に、希望を出してもらい、意見を出してもらおうっていうのを。

(松江)

アンケートの収集ですか。

(風呂田)

アンケートとか大げさなものじゃなくて、感想でもいいからポストの中に入れてもらうような。

むしろどういう解析をするかある程度決めておかないと、どういうスタイルの意見聴取がいいのかっていうのが出てこないの。

最終的にちゃんと意見を集約できるような段取りを決めたうえで内容を作ったほうがいいと思いますけど。

(松江)

風呂田先生がおっしゃったのは、お客さんの層と人数の目標設定というのが必要ではないかと。利用の目標設定というのがいいのではないかと。

(風呂田)

今、アンケートを解析する環境教育の中で新しいやり方をやってきているので、統計解析に近いところなんですけど。

そこを1回考えて、私達の中ではなかなかノウハウ持ってないんですけど、それに基づいたアンケート用紙を作るというふうにしたほうがいいと思うので。

大きく分けて、選択型の回答と自由記述の回答と2つあって、今はどちらかという自由記述のほうに色んな意見が入っているので、実際、意見収集は精度が高いんじゃないかと。

ただそれを解析するやり方を決めておかないといけないので。それは統計解析の中で、いろいろなところ環境教育の中でいろいろと工夫されてますけども。

(東)

分けるという言葉が不適切ですが、この段階で入っていただいて一緒に造った感をもっていただくと思うそういうグループと、ある程度方向を出して、それに対して意見をいただくというグループと分けたほうがいいのかなと思うんですけど。

(風呂田)

やっぱり何が面白かったかというのを、利用者から素直に聞くような、そういうところは価値として生かしていかなくてはいけないところだし、より価値を高めることを考えないといけないので。

(東)

その利用者に対する意見聴取というのは、この段階でやるととても難しいところがあるのかな。

と言うのは、考え方と何をしようとしているのかと説明して、ご理解いただいたうえで意見をもらわなきゃならない。その不特定多数の方とやるのはいいのかどうか。

得られるものは何だろうというところ。それを対象とするには、ある程度まとまったグループとか組織のほうがいいのかなという感覚ですけど。

(風呂田)

さっき提案されたようなJCとか、まちづくり懇談会。ある程度概念的になると思うんですよ。実態を知らないけど、こうしたらいいんじゃないかと。それも非常に必要な情報なんですけれども。

(東)

あるいはもっと密接に来て見てもらうとかね。そういうところから入って。

(風呂田)

やっぱり、一番意見をちゃんと持っているのは利用者そのものだろうと。

あるいはリピーターがいれば、そういう方の意見が一番具体性が高いと思うので。そこは何らかの形で意見をまとめておかないと。

要するにシステムだけは頭に描いて、ああだこうだ言い出すと、現実となかなか対応できないような考え方になっていくんじゃないかなと。

(蓮尾)

一応、ごく一般的なアンケートはずっとやっています。

子供さんにちょっとおみやげを差し上げるような事をスタッフがやっているものですから、圧倒的に多いんですけど、中にはこれはというようなご意見はあります。

月々大体、10枚から20枚くらい普通のアンケートは回収されています。年間通すと200枚以上はきています。その中にこういうようなご意見が入っていることもあります。

ただ、それは観察舎に来られてという方なので、保護区の中に深く関わったとか、場所がどんなところか知った上で、というふうに書いて下さっている訳ではないんです。

単純にこういう事が面白かったとか言うことは、多少なりとも吸い上げは可能なんですけど。

あと、団体利用の方には、団体利用の方としてのアンケートをお願いしていて、それは具体的なコメントも書いていただくようにしています。

ただ設問だと、アンケートを書いていただく方の設定というものを、意図的にかなり、言うなれば質の高い回答を求めないとなかなか今やっている中でも、これは諦めた方がいいなということはありません。それはある意味で自分達でも出来る事でもあるんですけど、まだそれだけでは足りないなと思います。

だから吸い上げるというか、その方法も考えなくちゃいけないなと。当然一番大事な設問についてももう少しきちんと、こうやったら意見出していただきやすいっていうような設問を考えなくちゃいけないなと。実を言うと、本当に意見をもらいたい方は、観察舎の中に入って来られない方かも知れないなという気もするんですよ。

今のアンケートは観察舎の中に入った方にしか書いていただけないものですから。

(風呂田)

外部評価的なのはさっきの組織があるので、それはそれでやっていける。

それと、やっぱり内部利用ユーザーとしての意見という、二つの視点でやんなきゃいけないので。

外部側からのいろいろな意見っていうのは、ある程度システムチェックに出来そうだと。

むしろ問題なのは、中で感想を持った人がどういうふうな意見なのかなっていう。

それは今私達も大学なんかでもやっているんですけど、設問をしない設問という。“好きに書いて下さい”。そうすると、自分がイメージ持っているものは単語としていっぱい出てくる。動詞であったり、名詞であったり、感嘆語であったり。そういうものを解析することで、どういうそこに意見を持っているのかというのを分析するやり方が、いま結構環境教育の中でやられていて。

あまり設問すると、どうしても意見誘導になってしまうので考えちゃうんです。要するに、いい回答をしようと。

結局、現実とちょっと掛け離れてくるという可能性もあるので、とにかく思いついたこといっぱい書いて下さいとあって、その中で出てくる言葉を拾い上げて、それによって意図を整理していくという、そういうやり方を今、環境教育の現場でけっこうやっていますので。

そういうやり方を僕らも踏襲していけば、自由に書いてもらうことで、逆にどういうことを皆さん頭の中にイメージしているのかが見えてくる。

それに基づいて、実際に利用に関してどういうふうな行為をしていったらいいのか。そしてそれを利用するわけですけども、必ずしも、コメント・意見ではなくて、自分の持つてゐる内在的な感じ、フィーリングを出してもらってという、そういう意味でのアンケートといたしますか、意見を集めたらいいんじゃないかなと思いますけど。

(東)

要は手法の話で、目的はやっぱり一緒にやった感とか、保護区の将来像について一緒に考えを出して何かやったよってということ、まずはそれだと思うんですね。

次の段階でその理解を求めるといふ。アンケートって手法がいいのかどうか。

例えば、風呂田さんと蓮尾さんがおっしゃられていたような事って、現地説明会みたいなことをすればある程度出てくるだろうし、その中で最後に紙を渡して発言できなかったことを書いてくれみたいなことでもいいのかも知れない。

そのほうが、こちらも伝えたいことが伝わるかなというふうに思うんですけどね。

対市民っていうことを、いつどういうふうにやるのがいいのかなっていう。

(風呂田)

例えば、観察会やってますよね、土日なんかでも。

そういった後にどういうことが面白かったかというような、体験的なところでどこに興味を持たれるのかっていう、そういうのも1つのアンケートだと思うんですよ。

それは実際に中に入って、一番ある意味では接近度の高い人達はどういうふうな感想を持っているかと。さっきのJ Cとか懇談会っていうのは、わりと接近度は高くはないんだけど意識は高いというグループ。

それからあとは教育関係者で、自分達がこういう場所があると、どういうふうな教育としてその場所が生かされるかという、教育専門家的な意見としての、そういうのって意見をもらう人のグループの特性を生かしたやり方を考えていかなきゃいけないんじゃないかなと思うんですけども。

(東)

J C (青年会議所) にこだわっているのは、保護区の将来像を進めてく事、地域の宝みたいなものにしないと根付かないと思うんですね。

その為には地域で一番そういう感じの活動されているところと。

(風呂田)

地域の人達も一番価値を見出すのは、内容そのものというよりも、そこでどれだけの人達が喜んでいいのか。特に子供達がどれだけそこで幸せか、効果的に環境というものを見ているか。

そこに来ている人達の得るものを見て、価値を評価すると思うので。だからやっぱり出来るだけ実際に来て喜んでくれている人達が、どうやって増えていっていかってという事をまず狙っていかないといけないので、利用した人達がどこを喜んでくれていたのかということが一番大きな情報になるんじゃないかと、基

本情報になるんじゃないかと思いますけど。

社会的な価値というのは理屈の価値よりも、むしろ人間がどれだけそこで幸せ感があるかと。

(東)

先生がおっしゃったのは、僕らの目線じゃなくて、今ある状態を市民の方、普通の方が歩いてどこに魅力を感じたかという事をもっとちゃんと知っておくべきだという話ですね。

(風呂田)

そうですね。特に子供達が、やっぱり一番ノリがいいと思うんですよ。例えば小学校と一緒にあって遠足みたいな形で中を見学してもらって、ある程度誘導もしなければいけないんでしょうけども。

そのあと子供達がどんな感想持ったって、作文かなんか書いてもらって。

その作文の中からくる言葉とか、その気になってるような内容について拾い上げてくと。

そうすると、どんな事に皆さんがどういう目で見てもらったのかなというのが見えてくる。

あんまり、おもしろかったですか、どうですか、○(まる)、×(ばつ)、△(さんかく)にすると、結局皆さんそれを迎合的に書きちゃうのであまり価値が出てこないと。

(蓮尾)

一応、市内見学で感想を送って下さっている学校がいくつかあるんです。掲示してある物もあるし、そうでないものもありますけれども。それは子供さんが実際に観察舎に来られて、その周囲を見ていただいたりした時の率直な意見というところが多々あります。

意外なのは、野鳥病院にやっぱりみんな興味を非常に持つっていうか、ただね、理由がちょっとありまして、見学に来られるのは9月、10月が圧倒的に多かったので、望遠鏡で見る鳥が少なかった時期なんですよ。それもあると思います。

そういった形で、普段の吸い上げは、学校はわざわざ必ず作文を書かせたりするところがありまして、そういうものはあまりこちらがあれこれ仕掛けをしなくても、取り入れる事が出来るかな。

もう1つ、観察会が終わった後、例えば10分間時間とって、ちょっと今日はこうこう言う訳なんで、皆さんのコメントを一言でも二言でも書いていただきたいという事はどうですか。

(東)

この将来像を決めていく中で、どう市民を巻き込んでいくの、あるいは将来像について市民からの意見を聞くの、それをどう生かすのという話をしたいんですけどね。

(風呂田)

それは運営の話ですよ。運営の将来像。

(東)

そうです。

(風呂田)

それはそれでやってかなきゃいけない。それと同時に中身を魅力あるものにして、できるだけ多くの人がここで楽しんでもらうには、どういうものがはたして素材の中にあるのか。

(東)

今ここでイメージ持ちたいのは、ここだけで将来像を決めるのではなくて、将来像を決めていく過程の中で、どうやって市民を巻き込むの、あるいは地域の方々をどうやるのという事。その手法についての議論をしたいんですよ。

(風呂田)

ただそれはレストランに例えれば、いいおいしい物を出して、いいレストランとして流行するにはどう

したらいいかって事を経営者の視点からとか、あるいは物づくりの視点からとかやるという事は今の話だと思うんですよ。

やっぱり基本的には、お客さんがどういう物を期待しているのかという市場調査がなきゃいけないので、それは、実際こうして使ってる人達からの意見でしか出てこないと思う。

そこも一緒にやっとなないと、結局経営しようとしても、何を売りにしたらいいかというのがわからない。

(東)

わかりました。

市民とか子供達が、保護区の中に何を魅力的として感じているのかという事をしっかり捉えようよと、これはこれでやらなくてはいけない事だと思っています。

これに加えて、これをまあどういうふうに組み込んでいくかという事があるんだけど、これに加えて、じゃあ、どういう段階で何を聞いていこうかと。

だから、将来像としてこんなイメージを持ってますよ、という事を説明をまずしなくちゃいけないし、考え方とか、こういう具体的なところとか説明しなきゃなんないと思いますし、その上で意見を聞きながらどうやっていこうかという事を、どういうふうにやるかと思うんですけどね。

(風呂田)

お互いまだわからないとこいっぱいあるので、会っていきなりやったほうが早いんじゃないですかね。こういうテーブルでもいいし。

(東)

はい、そうですね。

確か前回ね、林先生から結構教育関係者ってどこに声掛けるかって難しいんだよという事を伺った記憶があるんですけど、それはどうなんですか。実際にどこへ声掛けに行けばいいんでしょう。

(林)

市の教育研究会の理科部会みたいなのがありますから、その小学校、中学校それぞれあります。

(東)

市の組織なんですね。

(林)

市の教育委員会の半分公式みたいな感じですよ。

(東)

なるほど。

(林)

でもちゃんとルートはあるはずですよ。

日本の教育って、見事に縦割なので教科別なんですよ。

教科によって違うので、まず理科がありますよね。社会も当然あると思います。それから生活科もあります。生活科も大事です。生活科は1～2年になるんですけどね。それと、あとプラス何か。

あとは市によってもちょっと違う、いわゆる分科会みたいなものがあるかも知れません。調べればわかると思います。それはまず最低限の押さえですよ。あとは博物館にアクセスできると、割に馴染みの先生方みたいなのが割とサッと出てくるかも知れない。自然博物館にアクセスすれば。

(東)

中央博じゃなくて、市川市の？

(風呂田)

大町。

(林)

ここに本来博物館の人も本当は入ってほしいところ、というか私よりもその方のほうがかえっていいかも知れない。

どこかの段階で、今回私はだからそういう形で入っていますが、市の博物館の方は絶対早いうちに。

(東)

なるほど。

(蓮尾)

協議会にはおられるんですね。

(林)

そうですね。

そこを、知り合いももちろんいますけど。そこをたどれば、そこから例えば地元の関心ありそうな方とか、動けそうな方とか。

高校の先生もこのあたりに赴任されていて活動されていて、このあたりで動かれている方なんかはご存じなんだろうから。

(東)

じゃあ、まずこれですね。

(林)

既存の動いてる人達を、まずは押さえるというところからスタート、それだけで済ますっていうんじゃないですけど、そこから始めるという意味でいえば、あの、先生方で言えばそこがスタートになると思うし、あとはついでにちょっと言いますが、先生以外の市民グループみたいなものの中でも、もう少し周辺まで広げたら、公民館だとか、コミュニティーセンターという、そういうところで関連のしそうなところに一声かけてみて、一般向けとは別のもうちょっとフォーカスグループみたいな言い方しますが、そういう関心を持った人達向けのそういう説明会でもワークショップでもいいんですけど、そんなものはあってもいいかも知れないと思いましたけどね。

今だと、どうしても自然の話にこだわってますけど、偏り過ぎなので、広げる為にはそれもまた雲を掴むような話をしても始まらないので、現にやっぱり現地で動いていて、それこそ昔のそういったものみたいな事をやっておられるところがあるんだしたら、それは探せば割とサッとあれば出てくると思うんですけど。

そういったところにアクセスしてみて、ここでもそんな事考えているんだけどどう？という声の掛け方してみると、割と的確な反応が期待できそうかなという気がしました。

(東)

わかりました。

教育関係者をターゲットにするなら、まず市川市の博物館のどなたかと相談して。

(林)

そう。それとあと学校ですね。

市の教育委員会に直接行けば全然問題なく。市の教育委員会のほうで。

(東)

市川市の博物館のどなたかに相談すると、的確なところが出てくるんじゃないかと。

(林)

それは十分あると思いますよ。

ただ、だからそれよりも市の教育委員会の教育研究会っていうのはもっと逆にフォーマルなので、そっちから行ってみるとかね。

(後藤)

教育研究会って、学校の先生達が集まって勉強会みたいなのがあって、理科部会とか、低学年の生活科の部会があって、多分それぞれ浦安だと 20~30 人いるんですかね。

集まって月 1 回かなんかに勉強会やるんですよ。多分それが行徳の事をその場に来てもらって、見てもらって、そこで意見いただくっていうやり方はある程度出来るかも知れない。

(林)

そうですね。

年間色々なところで研修会やりますから、1 回ぐらい、この日のうち 1 回ぐらい来てよと言って、向こうの日程が合う時にこちらと合わせて。

(東)

現場を見ていただいて、その上でご意見いただくと。

(林)

平日の半日ぐらいなんです。あんまり長い時間とれないんですけど。ほんとに短い時間での勝負なんです。

(東)

もう一度教えて下さい。研修会？

(林)

研修会です。ですから教育研究会、市川市教育研究会小学校部会、中学校部会の理科部会とか。

(蓮尾)

基本、水曜日ですよ。

(後藤)

そうそう、水曜日の午後。

(東)

要はそこへ行っちゃうと 3 回やらないといけないですよ。理化部会、社会部会、生活部会。どれが効果的なのかという事を知るためにまず教育委員会に相談に行くと。

(林)

それもいいと思いますよ。

(東)

2 番目として市川の博物館に相談に行くと。

あとは、3 番目としてコミュニティーセンターまたは公民館。これは近場で何か調べてみるしかないんでしょうね。

公民館いろいろ伝手ありましたよね？

(蓮尾)

来てくださってるところもあります。

(林)

ありますよね。

(東)

できるだけ近くがいいんですね。

(蓮尾)

近くだと、幸かなあ。今来てくださってるのは。

(東)

幸だとずいぶん遠いな。

(風呂田)

ここは何かないんですか。

(東)

ここね。

(風呂田)

本当のお膝元の。

(東)

森川さん、心当たりありますか。行徳公民館で何かそういう。

(森川)

各公民館でいろんなサークルっていうのがありますよね。

その中でどういうものがあるか、申し訳ないですが把握してない部分があるんですけど。

(東)

なるほど。

公民館かコミュニティーセンターの、何かそういうところを管理されてる方に相談に行って、どうしようかって、それこそ相談するところから始めるしかない。

(森川)

公民館を取りまとめているところはありますからそこに相談して。

ただ各公民館でどういうサークル活動があるかっていうのは、その公民館でないと分からないというのが多分にあるんじゃないかと。

(東)

なるほど。

(蓮尾)

こちらの友の会で年に4回、各公民館、各小学校、各中学も。

それに、四季の便りということで、今こんな事やってますという、小さいA3のポスターを2つずつお送りしてるんですね。それを見て団体利用してくだってる方も時々いらっしゃいます。

(東)

幸公民館と、あとどこですか。

(会場)

西武公民館。

(東)

西武。それからもう一つはどこなんですか。3か所ですか、4か所って言ってたかな。

それは後で教えて下さい。

具体的にはここの団体利用されてる方の誰に聞けばいいの？あるいは公民館の館長になるのかな？

誰に連絡をとるかという事を知りたいんです。誰と連絡をとって実際に事務局が行って。

(風呂田)

基本的に公民館っていうのは教育委員会でしたっけ？教育委員会にどうせ行くんだったら、その中で公民館での伝手も。

でも、場合によってはこっち、友の会なら友の会に企画として、公民館にも参加を呼びかけて、例えば行徳保護区の中を徹底的に探索しませんか？みたいな会みたいなのを作って、公民館でそういう掲示をしてもらって、人を集めてもらうという手もあると思んですけど。

(東)

じゃあ、イベントの声をかける先という位置づけですね。わかりました。教育関係者という事はそういう事になりますね。あとは青年会議所ですね。これはもうまともに。

(林)

もうストレートに。

(東)

言いに行く話ですよ。

(林)

行けばいいと思いますよ。全然。

(東)

青年会議所で、こういうことでこう考えていると。

それぞれどうなんだろう。

(風呂田)

向こうの都合のいい時に、こっちから行きますからという事でしかないと思うんですけど。

(東)

イメージしたのは一応協議会が終わった後、具体的に動き始めて何回かそういうことを夏前くらいまでにやってまとめて、また秋からワーキングという感じなんですかね。

これはアポとって行くと。

(風呂田)

多分そういう事を検討するような集まりはなく、組織の中にあると思うので。

(東)

そうですね。

(磯部)

一緒に造った感というのは、大きく分けて行徳湿地をどのような環境にするのかということと、そこをどう使うか、利用するか、そこに来て何をやりたいかという事を分けると、主に聞きたいのは後者でいいんですよ？

(東)

いやでもね、前者の段階から。

(磯部)

前者の段階から、何らかのご意見をいただいて造っていきたい。

それをまあ入れながら、どう利用したいか。そうするとなかなかアンケートの内容というのが難しくなってくるような気がしますけど。

(東)

対市民ということでの利用って事でしかないと思うんですけども。

どこか、こういう自然好きだけの人じゃないところで、造るところから組込みたいというか、意見を聞きたいですね。可能なら。

(磯部)

利用が中心であるとするれば、ある意味であそこをサポートしてくれる人って想定すると、近所の人というのはないのでしょうか。

(林)

僕も自治会をちょっと言おうと思ってたんですけど。

(東)

なるほど。

(磯部)

近所に住んでる人達がどれだけあそこをサポートしてくれるかというのは、つまり、それに対して非常に好意的、無関心、敵対的があるかも知れませんが。

少しでも近所に住んでる住民の人達にとって、一緒に造った感があるっていうのは非常に大きいような気がするんです。

(東)

おっしゃる通りですね。

(磯部)

そういう意味ではアンケート調査の対象としては、1つの可能性ではないかという気がしたんですけど。

(東)

むしろ今の住宅の接してる住宅のところと、保護区の丸浜川側からの通りがもろに接してるんですよ。

そこがどうあったら僕らがいいと思うのか、それから住んでる方がいいと思うのか。

それをこすり合わせていく作業っていうのは面白いかも知れないですね。

その中でこういうものが出来たという。

(磯部)

最終的にはこのワーキンググループで議論をするし、協議会もあるし、最後は県が意思決定をするというプロセスがありますので、そのプロセスの一部としてはどういう意見をお持ちかという事が入っていてもいいかなという気がしました。

(蓮尾)

後藤さん、しめ飾りの時のご感想なんか教えていただければ。

(後藤)

昔あったものとか文化とかそういうのが、保護区にたまたま田んぼがあるので、それをワラをとってしめ飾りをやるっていうと割と人気講座にはなるみたいで、毎年お手伝いさせてもらってるんです。その辺の昔から行徳にあった文化も含めて、それを共有していくというプロセスの中から、入り易いところから入って、じゃ何を作っていたら住民の人達がそこに参加してくるのかっていうところが重要なのかなと思ってるんですよ。

利用といってもいろんな利用の仕方があって、さっき住民は大事だよって話をもっともだと。

浦安の市民参加の公園作りの時に、半径600mでアンケートとったらいろんな意見出るんですよ。

それもワークショップを何十回重ねてやって、その中で極端な意見というのはだいたい消えてきます。

行政が消そうとすると駄目なんだけれど、住民の間で消えることというのは、だいたいまあ6~7割

の人が賛同すれば、それがそこに来て幸せだなあと思うような事はある程度固まってくるんで。県がこれは駄目だよって言うと、ものすごく上手くいかないんだけど、住民の中で話し合っただけで決めるとうまく行く。

それなり考えると、管理も含めてそこに参加してくれる人っていうのは近くの人がベースにある程度あって、持続可能な事になると思いますし、その辺は十分さっき磯部さんが言われたとおり、地域、あまり狭くない特定の自治会だけじゃなくて、もうちょっと少し周辺広く。

それからちょっと気になったのは、さっきのアンケートの件なんですけど、例えば散歩する人はあの道しか通らないですよ。その人の視点でこういうのがあったほうがいいってのと、観察会の中に入って、やっぱりそこでは違うのかなと。

だから、どこを使っただけで見た感想なのかをちょっと切り分けてやらないと、干渉って言ったって道路歩いてる人はわかんないでしょうし。

もし中が見たいというアンケートの中でそういう事が書いてれば、そういう人を少しピックアップしてみるみたいなこともね。それで中に一緒に入ってみて、こういう場所だよっていうのも。そういう事もあるのかなと思います。

それから、さっき研究会っていうのは、学校のほうも配ってるんですよ、題材を。生活科からは何をやりたいかっていう。先生方は一生懸命考えているけど、なかなか考えられないんで苦痛なんです。担当の先生は、絶対に言えばね、かつ行徳の物なので、絶対それは飛びついてくると思いますので、非常にいい視点だなと。

それは結局、学校教育の中にどうやって使ってくかという研修の場ですので、普通入り口が開ける事は非常に大きい事なんだなと思います。以上です。

(東)

はい、ありがとうございます。

(磯部)

活動の種類を考える時には、利用者の数は1日例えば100人から1,000人の間って感じですよ。

1万人じゃないですよ。10人じゃやっぱり寂しいですよ。その位ですよ。

その位ならばできる事、100人ならばそれなりにがんばってサービスしようと思えば、観察会を今のうちにやるって事も出来ますよ、でも1万人じゃあとても出来ませんよ。

(東)

1,000人でも大変かも知れないですね。でもまあそんなところですかね。

(磯部)

そのぐらいのイメージでできる活動について聞くっていう、そういう事でいいんですね？

(東)

はい。

(風呂田)

全くサポートしなくても楽しめてる、例えば今散歩してるような人は一番多いユーザーだと思うんですよ。

そういう何にもしなくてもいいから、自分達でやる事でやりたい事は何だろうかと。そういう視点もいるんじゃないかなと思います。

それだったら1万人来ようが100万人来ようが、キャパというか面積の問題が出てくるけど、こちらとしては何もしなくてもいいという。

(磯部)

いずれ最後は、例えば子供に聞くっていったら、動物を捕りたい。魚がいるんだったら、釣って食べたいところがありますよね。

もちろん、そういうところと環境を維持するということは両立しないので、どっかやっぱり線を引かないといけない事には当然なるかなど。

その辺のイメージが崩れないようなアンケートの格好にしないといけないですね。

ですから、私はそういう意味で先程ちょっと言いかけた、やっぱりどちらかというところを利用のところを聞くのが主で、ここの環境をどうします？というところには、やっぱり主にはならないんじゃないかという気がしたんです。

そこを主にしてしまうと、そこで野球したいなんて話が出てくる。

(東)

確かにおっしゃる通りですね。わかりました。

(風呂田)

だから、ここも私達が言ってるエコミュージアムでの視点でという事を、皆さんにまず理解していただいて。

(磯部)

やっぱり行徳湿地のイメージは大体こんなものです、あるとすると、そこで何がしたいですか？っていう、鳥を見たいですか？とか。

(風呂田)

あるいは子供達を連れて来るには、どういうものがあつたらいいでしょうかとか。

(磯部)

ただ見るとしても、ただ漠然と見るんじゃなくて、誰かが説明してくれると有難いですねという意見があるかも知れないし、その説明にしても現象をただ見たいというのから、本当に解き明かしてほしいというのもあるかも知れないし。そこが今日の話題のエコミュージアムとか、博物館というところの差かっていうことだと思いますけど。私は大学にいる立場なので、そこをできるだけ解き明かすというところまでやったら、すごく奥が深いおもしろいものになるんじゃないかなと思ってました。

(東)

大体話がまとまったところかなと思いますけど。

意見聴取について、会場の方でもしご意見、それからご提案、そういうものがあつたらぜひ教えて下さい。どうですか。大丈夫ですか。

(会場)

保護区の中については、それ専用の中に入ってからのご意見はどうですか？みたいな観察会は出来ると思います。

教育委員会の理科部会のお話が出ていましたけど、昨年船橋の中学校の理科部会で、今度・来週あたり、浦安市の中学校の理科部会が団体利用で来られます。その時にちょっとお話をしてみたほうがよろしいのではないのでしょうか。

(東)

はい、ありがとうございます。

他にどうですか。いいですか。ありがとうございます。

まとめたほうがいいですか。だいたい皆さん大丈夫ですか。

(事務局)

今、皆さん議論いただきまして、タイムスケジュール的なものはだいぶ見えてきました。ありがとうございます。

アンケートを聞く方法というのは大体まとまってきましたので、そのアンケートを問いは、どういうふうな利用をしたいですか？という事を主体とする。

その中で事務局が今年度作成しようと思っている「行徳湿地の目標に向けた概念図」ですが、これを素案から案にするために、利用方法について検討していければと思っています。

先ほど東さんがおっしゃられたように、概念図ができた段階で、概念図をもってアンケートする事によって、利用計画や将来像が決まるまでに、市民の方の声が入ってくるのではないかと思います。

(東)

はい。わかりました。特にまとめなくていいですね。

相当具体的に何をしたらいいかというのは見えてきていると思いますので。また是非これは別途打ち合わせして。あと分担もできれば分担もしたいですね。

それでは、次にやるのは参考資料1-4になるんですかね。

(事務局)

そうですね。その項目の中の問題点というのを埋めたいと思っています。

(東)

この「行徳湿地の特徴的な機能を高めるための施策実施に向けて」ということで、1番のエリア毎の目標(案)というのが大体まとまっていると思います。

改めて読んでみて、これ分かりにくいとか、ちょっと表現が違うんじゃないのとかいうところがあれば教えて下さい。

縦2の『利用を図る上での特徴的な機能の“目標達成のための施策”及び“問題点”と“対応案”の検討』という表で空いているところがあります。

そこへ行く前に、特徴的な機能として出せたのが、

- ①東京湾奥の自然(歴史を含む)を感じる場所
- ②景色を楽しむ
- ③ボランティア活動の場
- ④環境学習の場
- ⑤環境再生の取組
- ⑥科学的調査の場
- ⑦野鳥病院の活動
- ⑧他の湾岸施設との連携

という項目ですけれども、これに加えるものというのが何かありますか。確認です。

何か、この他に特徴的なもの。三番瀬の後背湿地というのはたぶん①に入るんだと思いますね。

(蓮尾)

国内外を問わず、他団体との連携あるいは交流というのは入れなくていいですか。

(東)

他の湾岸施設との連携とは別にして？

(蓮尾)

あるいは他団体なり施設なりというハチを拡大しちゃってもいいかもしれません。ただ、他の湾岸施

設とは密接に連携したいとがありまして。

他団体というのはそれこそ、アジアンボードフェアみたいなあるいはジャパンボードフェアみたいなそういった。

(東)

国内外の団体ですか、団体との交流。

(蓮尾)

団体施設でもいいかも知れない。

(林)

施設入れてもいいと思いますよ、全然。

(東)

はい、他には何かありますか。

会場の方でこれも追加した方がいいんじゃないかというのがあれば。こういう機能があるよっていうのが。

ではですね、目標達成のための施策として書かれているのはこうなりますね。

1個ずつ何か出していこうとするととっても大変なんで、意見を言ってもらって、その意見を聞いて、あと何人かで文章にしていくしか無いなと思っているんです。

だから、景色を楽しむというのは、あそこの景色を楽しめるでしょうねと。それで、どんな問題点があるのとか、景色を楽しむ保護区の中でもいいし、丸浜川沿い歩いている感じ、あるいは観察舎の中から外を見て楽しむのか、何か問題点はありますかという。

まずそこから行ってみませんか。

(後藤)

例えば、環境学習の場っていう位置づけがあって、今これから議論しようとするエコミュージアムという言葉があるとすると、絶対、行徳湿地の中でそういうものが達成できるものって何なんだろうかっていうものがありますよね。

(東)

そっち先にやりますか。

(後藤)

いやいや、順番はいいんですけど、たぶんそうしないと方法論だから、方法論の問題点をいくら詰めていっても。

例えば、今年海苔をやられたみたいですよ。海苔っていうのは、僕らはどこでそういうことが出来たのか分からないんですよ。

ただ将来的に海苔っていうものが、もし出来るとしたらそういう場所があれば、そういうものを環境学習に使って行きましょうとか、そういう切り口というのがあるのかな。

そうしないと何となくこれ、やっていくと詰まっちゃうような気がして。

じゃあエリアとして海苔だったら、この辺だったら何処どこで取れるんだから、じゃこっち側で海苔すきやってみようよとか。

そういう話もうちょっと具体的なゾーン、それから前、風呂田さんおっしゃった、稜線ですね、海に対する稜線がこうだったらこういう生物が復活するから、じゃあ、こういうところにこういう物をつくってあげれば、体験の場とか、観察の場とか、調査の場としてそういうものが出来るでしょうっていう視点がありますよね、環境学習だけで切らないで。

それが多分エコミュージアムっていう全体的なものになると思うんで、むしろそっちと合わせながら考えないと。

(東)

ということは、これを先にやったほうがいいですかね、教えていただいたほうが。

これを共有認識として持っていた方がいいと思うので。エコミュージアムの従来の博物館の違い。

これを一通り縦2を読んだところだと思うんで、頭でこれを林先生からレクチャーして頂くと。

(林)

別途資料のお渡しを私のほうでお願いしまして、こちらの方がよりバランスが取れているのでいいかなと思ひましてやりました。

実は最近また、博物館そのものの定義というのが2007年に国際的に大きく変わっているんですね。

博物館が何を扱うかというのが、従来は基本的には物だったわけですよ、当然ですけどね。

物だったんですけど、2007年の新しいICOM:国際博物館会議という、世界で一番大きな博物館関係の関係者の集まりのところで博物館の定義がどう変わったかということ、『人間及びその環境についての有形及び無形の遺産』という言い方になったんです。それを扱うという事になったんです。

その環境に関する有形及び無形の遺産という事なんですね。つまり無形の物まで扱う博物館が全うな物として扱うということになったんです。

何を言いたいかと言うという、それ要するにエコミュージアムを完全に含んじゃう。鬼っ子じゃなくて、全うな道だという話になりますので。

ただ、現実に日本の博物館法というのが博物館にはあるんですけど、全然そんな事書いてない。

日本ではそういう博物館とは別に文化財保護というのがきちんとありますから、文化財保護の中で有形な物も無形な物もそれなりにやるとなっているので、博物館がそれに手を出そうとすると嫌がられる訳ですよ。だから縦割りがありますから。

世界的に見てもまだここまでキャッチアップしてない、追いついてはいないと思うんですけど。ただ遠からずそういう方向に向かっていくというのは予想は出来ます。

だから、エコミュージアムというのが、現状まだすごくイマイチかも知れませんが、無形の物まで扱うのは全く不思議では無いし、建物の中に入らない物まであっても全然おかしくないし。

最近ですけど、自然無形遺産という、インタンジブル・ナチュラル・ヘリテージ (intangible natural heritage) という本が出てるんですよ、実は。

思いつきで誰かが言ってるだけではなくて、ちゃんと本が出てるんですね。

何が入っているかということ、景観とか音とか無形じゃないですか。だからそういったものを自然無形遺産なんですけども。例えば、自然との付き合い方みたいな話。

要するに子供の自然の中での遊びなんていうのも、こじつければいくらでも入っちゃいそうな気もして、たぶんまだ概念整理の段階なんですけども。

ただそれぐらいチャレンジ的な事も行われているんですね。日本ではまだほとんど誰も注目していないんですけども。そんな物もあつたりします。

だから、従来の博物館というのは、どうしてもやっぱり標本になる物だとか、ケースに入る物だとか、どうしてもほとんど中心になっていきますけれども、必ずしもそれだけでは無いんだよということを頭に入れといてもいいし。

日本の場合にはいろんな法制度の中で無形の民俗文化財みたいな物って博物館はあんまり扱わない。別枠でやっちゃったりとかするんですけど。将来的に一緒になっていくという可能性が僕は見えてるん

ですけどね。

というのも含めてですが、エコミュージアムって言うのは伝統的な博物館に対するアンチテーゼだというふうに明確に覚えて、意識していただいて、少なくとも開発された時はですね。

開発された時にははっきりとそういうふうに意識されて、1970年代初めですけども、ケースの中に入る物を、どこか取れたところ、あったところから別のところに持って来て、偉そうな人が偉そうに並べて見せてやるという風にやるのが博物館です。伝統的なね。悪い意味で伝統的な博物館。

エコミュージアムっていうのは地域の住民、今回お渡ししたほうの資料ははっきりその辺りきちんと書いてますが、地域の住民が主役なんですよね。もちろん、学芸員みたいな人が当然居る場合もあるんですけども、居ない場合もあるみたいで。

地域の人達がやっぱり中心になる。それは教える側もそうだし、教わるのもそうだし、学ぶのもそうだし。もちろん、そこに訪れた人達に対してやるっていう部分もあるし、そこでもコミュニケーションもある。

ケースの中に入るような物で無くても、現地でそのままという形ですね。地域住民がという形の物なので、全部先ほどの伝統的な博物館と全く違う。

今日、これを改めて読んだと思って提案しようと思ったのは、考えると、行徳のあそこの湿地だけを考えていていいのかという問題があるんですよ。

市川市全体のグランドプランの中で、どんな位置づけになるんですかという話もどこかで一緒に考えないと、そこだけ突出してやったって困っちゃうんですよ。

聞かれるほうだって困ると思うんですよ、聞かれる側に立てば。だから考える側の時に、検討する側の時に、仕掛ける時にそういう仕掛けも必要なのかもしれない。

ただ、そうなる则とどんどん大きくなっちゃって難しいんですけどね。

(東)

これは大事なことです。どっかで、ザッとしたイメージだけでも持っていたいですね。統一して。

(林)

結局市川市って、物凄くそういう意味で豊富なんですよ。

これ程開発されている中でも、まだ残っているところが所々、湿地が山の方にもあるじゃないですか。海辺の湿地と山の方の湿地という関係が、同じ一つの市町村の中でこれだけ多様な物が楽しめるところなんてそうは無いと思いますよ。

そんな意味で考えると、水っぱいほうでいえば、川とか流域だとかいうようなことの繋がりも捉えたりだとかですね、色んなふうに考えていくと、自然博物館の市川市の博物館の人達にも、物凄くしつかり入ってもらえば、そういったところと一緒に出来てくるなと思っていて。

全体的な地図を見てその中で、これはどんな位置になるんだっていうのを考えると、こうやってこれだけ取り上げて考えてみるよりも、もう少し意味合いが広がっていくし、深くなってくるし。

市民全体に対して、ここ地域住民にももちろん迷惑掛かるし、メリットもあるんだけど。

市で動かすとなれば市だし、県全体というわけにはなかなかいきませんが、市にはすごく大きく影響があるのだから、市とかぐらいには全体の中での位置づけというのを、どこかで考えるという場も必要ではないのかなと思ったりとかはしましたね。

市川市全体で、こういうエコミュージアム的なサイトみたいなのがいくつかあるみたいな風になるみたいなことだって、全然おかしくないと思うんですね。

市川市ほど、人口もいるし、タレントもいるしってことですよ。十分可能だと思うんですね。

市民にとっても物凄くメリット大きいと思うんですよ。

毎週末、手を変え品を変えて、色んなところに楽しく遊びに行けるみたいな話になるわけじゃないですか。凄いメリットですよ。

ここだけっていうのにあんまりならないほうが、長期的に見てメリットがあるんじゃないかとちょっと思いました。

(東)

林先生に用意していただいた資料にまとまっているキーワードは、学芸員が管理の元でという事に対して、地域住民が主役になるんだよと。

受動的な利用ではなくて、地域住民が活用する場になるんだよということですよ。

(林)

そういうところは大きいと思います。

(東)

ただ、表現される価値というのは同じだよと。対象物と言うんですかね、展示物と言うのか、博物館として今までは展示とかそういう物があつた物に対して、専門家が説明をして受動的に聞くのが住民であつたと。

エコミュージアムというのは展示されてるものに対して、どう言ったらいいんですかね。

(林)

ここにも書いてある通り。だから、記憶も意味があるし。記憶だとか、伝統的にやっていたこと。

今は一時的に切れてはいるんだけど、昔、普通にやられていた、ここでももちろんやっていたということであれば、十分対象にはしているわけ。

さっきの稲わらがここで出来たとか、それでしめ飾りを作るなんて、これほど美しい事業があろうかと思うぐらいに、美しいと思いますよね。

それをどう今の若い人達に、少なくとも自分達で使う分くらいは作ろうじゃないかみたいなふうになつたらもっと面白いし、その為には田んぼももう少しあつても、他のところにあつてもいいんじゃないという話になつてもまったくおかしくは無いですよ。

(後藤)

この資料の中で、つまり四角の下で、その地の現在の生活や文化がどんな経緯でつくられてきたかという事を住民自身が知ると。という事はやっぱり行徳の昔の物がどういう文化があり、どんな生業をしてたか。それを他の地域の人達に見せる。

という事はその文化なり築かれたものを、もう一度そこでそういう生業を、今は消えちゃってるかも知れないけど、自然は少しは残っているんだから、それをベースにしながら生業の姿を見せてあげるとというのがエコミュージアムの特徴だと思うんですね。

狭くなることは無いんだけど、昔ここがどういう干潟だったかとか。

例えば、蓮田なり、水田だったり、それいうものがあつたり、この前も言ったけれど、水のコントロールものすごくやってた。

そこを小さい場でいいから作って、まず、そういう生業があつたんだよっていうのを見せてあげる。見せるとことというのが、人が通るところを使った方がいいんですよ。

もうちょっとディープなところ、例えば、湿地内に田んぼがあるんだけど、見えるところにもあつてもいいだろうと。

田んぼの1年の作業を、入口で見ていた人達の中に入って手伝っていく。そういう定着が出来れば、

季節ごとに人が係わって手伝って行く可能性があるなというようなことなのかなとなんとなく思っているし。

今回海苔の話メールを見せて頂いて、あれは素晴らしいなと思って。もしかしたらそれだけで一つの体験のミュージアムみたいなものが出来上がってくる。

例えば、ゾーンでこのところに砂を入れて、なだらかな干潟を造りましょうという話がありましたよね。あそこはやっぱり干潟本来の高さというか、なだらかなところにはどういう生物が付くかということも含めて、再生の実験の場にもなるわけですよね。

そういう係われる場所が出来たり、面白い昔の生業なりが出来てくると、普通の人達が入ってきてそれを手伝うよとか、葦を刈ってどうしたこうしたいいう事が1個ずつ出来ていけば、全部揃えるんじゃなくて出来るところから揃えていけば、将来的に揃えていこうよということになれば、本当の意味で、その近くの学校の人達が、昔、行徳はこうだったんだよという自慢も出来るだろうし、それに係わっていこうって人達も増える気がするんですよね。

(東)

今おっしゃられてたことが、うっかり落としてた、前に林先生がおっしゃられてた話があったんですよね。

要は項目をもう一つ加えるべきだよと。

(林)

文化的な話？

(東)

そうです。今の後藤さんが語っていただいた話がもう一つ必要なところですね。

文化的な、文化面の表現っていうんですか。仮にそうしておきますね。

(林)

文化といっても純粋的な文化というよりも、自然との付き合いだとか、自然の利用だとかそういうところですよね。

(東)

自然との係わり？

(林)

自然と人間のかかわりっていうと、千葉中央博で展示しているような名前になっちゃうんだけど。でもまあそういうところです。

(東)

自然との係りを示す文化面の表現と。仮の題でこんな風に。

(林)

表現だったり、再現だったり、体験だったり。

ここは非常に軸になるし、これでお客さんはいっぱい来る可能性は十分ありますよね。

(東)

今出てきたキーワードは、海苔、しめ縄、水田、稲作か。

(林)

塩田というのはどうなったんでしたっけ。

(後藤)

昔、大正時代までは、いわゆる行徳の特徴でありましたよね。

(東)

それもじゃあいれておきましょう。塩田。

(蓮尾)

戦後まで最後のはあったんです。

(林)

そういうことでしょうね。

そのくらいまではあったわけでしょう。

(東)

地引網みたいなのはちょっと違うんですかね。漁？

(風呂田)

漁業は基本的に手作業のやつでしょうね。

網はやっぱり沖合いにいかないと使えないので、地引網みたいのは。

(東)

そうですね。

あそこでなんかそれはちょっとまずいかも知れないですね。

(風呂田)

ただ、今現在のキャパとしては出来ると。

それはそれで別な、例えば環境教育だとか。

(林)

何が出来るかというのは別として、頭出しとしては漁労ですね、漁労。

海苔とか含めてだろうけど。

(東)

そうか海苔が含まれるんですね。これがキーワードですね。

(後藤)

例えば、水田の水をどうコントロールするかというのに、水利環境っていうのは物凄く市川というのは上総ぼりのあれから始まって、堰・水路、それが目に見えると面白いんですね、昔はこういうふう
にやってたよという。行徳に昔あったスエズ運河みたいなものがあったもいいのかも知れない。

(東)

それはね、脱線しますけれどもね、丸浜川で出来ると楽しいんですよ。

(後藤)

僕もそう思ってるんですよ。

入口でやるとみんな見るでしょ。

(東)

あそこは水位差があるんですよ。

脱線しちゃいけないですね。

(会場)

ちょっとよろしいですか。

エコミュージアムってお話がでたんですけれども。実は私ども三番瀬のフィールドミュージアムというの
が、三年目に掛かっているんですけど、やっておりましてですね、これはNGOです。まだNP
Oになっておりません。

スタートはですね、4～5年前に中央博物館で、山のフィールドミュージアムというのをやってるんですけどね。というのは、予算が無くて建物が山に造れなかったということ。

そのためにただ人間を雇った、経験者をですね。それで無くてもいいんじゃないかと。

ヨーロッパにエコミュージアムというのがあるぞということで廃校を使って、地域の子供達を集めて、山の生き物だの植物だのを調べたんですね。それを蓄積していったんです。

それが要するに山のフィールドミュージアム。中央博物館ベースでスタートして、生き物も毎月か、3ヶ月おきかに立派な本が出てますよ、小冊子。中央博物館で。その人間も募集したりもしてます。スズメをいくつか調べろとかね。

私達はその民間版ということで、実はそのフィールドミュージアムの視点からナックスジャパン（NACS JAPAN）理事長、それと中央博物館の副館長、この辺が中心になってあとは里山シンポジウム、この辺が中心になって、千葉県の中でそういうことが出来る場所がないかと、各博物館の分館を回ったんですね。

それを私どもくっついて行ったんです、たまたま。それで三番瀬が一番いいんじゃないかという話で、我々で作ったんです。

実は15回になりまして、今回。実はどういうところに行っているかという、例えば、三番瀬なんですけど、周辺も全部含めると、金杉の森ですね、船橋の。あれは山から繋がっている。

それから例えば、飛ノ台、あれは昔海岸だった。去年も一ヶ月近く、2週間ですが、写真展をやったり、講演会をやったり遊ぶ子供達呼んでやったり、色んなことやってるんです。我々主体でお願いしてやっています。

例えば、今月の27日に、先ほど風呂田さんのところに一部資料を渡したんですけど、三番瀬のフィールドミュージアム。浦安の博物館で海苔すきをずっと、1月、2月、3月やるもんですから、その企画展と手すきやるのを見に行くと。我々が募集するわけですね。30人くらい集めてそれを見学して、更にそこに海苔の講演会をやる。

ということで海苔協会の理事長さんが最近の海苔事情、学芸員が、海苔の生態と浦安の博物館でやってる海苔の養殖についての話、講演するということになってそれセットなんですけれど。

例えばだから去年の秋口ですかね、一応行徳の湿地の方もご案内して頂く。その時に中央博物館の植物の先生を一人呼んで生物対応する。そういう専門家と、もちろんこちらの行徳の方にご案内頂いてるんですけどね。30人くらい、中を全部歩いているわけです。

ということでもう15回になる、数えてやってるんです。報告もそれなりに出してあります。ということで、エコミュージアムというのは実は建物が無くても、現場が全部ミュージアムになれるという。それを市民が意図的に、要するに考えて、色んな地域地域でやって、その文化を含めてやっていくと。だから市川の場合はこの前大町の自然博物館、あそこも一応行ってます。

で、お願いするわけです、こちらこうやるから。30人くらい連れて行くと案内してくれるわけです。でまたこれはこうゆうことでこの辺とつながってきたんだと。そういう今実績が1年半～3年近く出来ておるんです。

実は、エコミュージアムという、ちょっとこれは判り難いところがあるんですけど、フィールドミュージアムという現場が全部ミュージアムですという考えで、それを千葉県の中央博物館は使っておるということで、今日ちょっとたまたま数枚持ってきますので、浦安のやつで。ちょっとご紹介して。エコミュージアムとフィールドミュージアムは同じようなことなのかなあという感じなんですけど。ご紹介だけ。

(東)

はい、ありがとうございました。

項目は、今こういう感じが出てきたのと、自然との係わりを示す文化面の表現みたいな課題を入れて、キーワードがいくつか後藤さんの話の中から引っ張り出せました。

あと、特徴的な機能に対応するための問題点というのを出さなきゃいけないんだけど、いきなりつまんない話になっちゃうんですね。

エコミュージアムというのをご説明頂いた中で、どっから入るのがいいんですかね。

(風呂田)

まず、それぞれの機能に関してどういう資源があるか。

あの中に、保護区の中に、あるいは保護区の周辺含めて。

(東)

資源ね。

(風呂田)

その資源っていうのは現在あるものと、潜在的にあるからそれを引き出すというのと二つあると思うんですけども。それに対して、じゃあ今どういうふうな問題点があって、利用するにあたって、出来るようにあたってはどのような課題が残っているかという議論の方がいいんじゃないですか。

いきなり問題点にきちゃってるけど、その問題点になる前に何が使えるのかなという材料を認識した方がいいのかなと思うんですけど。

(東)

なかなか難しそうだな。景色を楽しむ、ここから入ろうとするから大変なんですかね。

環境学習の場として考えた場合に。

(後藤)

たぶん、③、④、⑤、⑥辺りはさっき言ったテーマ別でそれぞれ課題が出てて、将来的にどういうものを作りたいっていうのが比較的まとまって。

そういったエリア意識しながらすれば、大体将来的にこういう場所があってもいいんじゃないのという話があれば、そこで何がどういうことを出来るか、具体的に、というような感じがするんですね。

難しいよね。

(東)

今、仮に①から⑧までの番号になってますけど、今日2つ加えたから10でしょ。

順番変えてもいいのかも知れないですね。

(林)

順番は順不同だから。

(東)

話としてはさっきの自然との係わりを示す文化面の表現みたいな事が一番最初に来て、理解しやすいのかも知れないですね。

こういう場所で、こういう能力を持っていて、こういう施策がキーワードなのかなあ。

(後藤)

環境再生の取り組みってありますよね。今、ゆりが浜が震災でだいふ。

(東)

そうですね。

(後藤)

もう一つ干潟的環境っていう意味では、高校の横の今ある干潟が削れてきてますけれど、あそこを少し干潟的環境にしたらいんじゃないかという話が。

2点になりますよね、テーマとして。

(東)

問題点としてはね。

(後藤)

そうすると、環境再生っていうことになる、例えば、ゆりが浜っていうのは地形を直してあげて、自然にどういうふうにする。こっちはユーザーとしては一般の人が入って、よりうまく観察の場として出来るだろうし。

もし、こっち側の高校のほうっていうのは、そういう環境が出来れば、それを例えばどういうふうにして地形をなだらかにした場合に、どういう生き物が付いてくるかっていう。たぶん干潟特有の生き物とかカニとかが付いてくる。

将来像として、そこがもし干潟が出来るのが想定出来れば、環境学習についても、そういう環境学習になりますよね。

それから再生と調査も含めて、じゃあどれくらい人を入れるかどうかというコントロールも含めて考えれば、そこについては何とかイメージが湧いて、この場ではこういうことをやりましょうということが具体的に出てきますよね。

(東)

ちょっと整理しますね。

風呂田さんがおっしゃってた、その現状、それから潜在的にどういう資源があるのかということ、どっかで一回整理したほうがいいですね。

これはこれで、ここでやっても結構大変になっちゃうんじゃないですかね。どうですか。

思いつくのをワーってみんなで言ってみます？

(風呂田)

大体イメージみんな共有していると思うんですよ。

それを文章化するだけの作業だから、1回出して、またみんなから足りない点があれば入れてもらうとか、修正してもらおうとか。

(東)

わかりました。

(風呂田)

私達というか事務局とか中心に集まって。

(東)

そうですね。

どっかで1回集まんなきゃ駄目だと思います。この風呂田さんがおっしゃられた資源というのはどっかで1回、ワーって文章にして、箇条書きにしてみましよう。

(風呂田)

あるいはもうメールでみんなでワーって出し合って、それでそれを書き加えてもいいです。

この終わりをエクセルファイルかなんかでこんなふうに入れて下さいって、空けとくなり別項目だったり。

(東)

この項目に限らず、みなさん保護区の現状について、こういうところが問題だと思うよってところを挙げてもらうっていうのがいいんですかね。項目にこだわると、そういうのあまり出てこないと思って。どうなんですか。だから皆さん1つや2つ挙げて頂くとか。

(後藤)

変な話、例えば目標生物の中にうなぎっていうのが。うなぎ入れたいねって話ありましたよね。今何処であがっているのか僕もよく知らないんですけど捕まりますよね、時々。

(会場)

そうですね。

(後藤)

あれは何処であがってる？

(会場)

今は結局、海との繋がりの方所っていうのがまた限られてきてしまっているんで、一番末端の7系列と呼んでいる水路のところとかは、よくシラスウナギのメッカみたいな。

ただ以前は、田んぼの、浄化池のところにもやっぱりウナギが入っていたので、そういったところも増やしていかないといけないのかなというふうに思っています。

(風呂田)

今、三島池でコンスタントに採れますね。

(後藤)

ああそうですか。

(東)

海と繋げちゃったから。悪いことじゃなくて。

(後藤)

悪いことじゃなくて、繋げたってことは1つの成果ですよ。

(東)

そうです。

(後藤)

もしかしてそれっていうのは、面白い事に展開出来るかも知れませんね。

(東)

そうです。

(後藤)

変な話なんだけど、そのうなぎっていう、例えば淡水池からね、海から繋がった場所であれば上がってくるわけですよ。

僕もびっくりしたんだけど、こういう湿地ですら上がってくるっていうのは凄いことで、それは風呂田さんがおっしゃってたけど、太平洋のあっちの方から来るというのがもし分かるとすれば、それが世界的に繋がっている。上がってる最後の場所として行徳湿地あって、非常に夢もあるし。

だからそれを、例えばうなぎっていうのを目標に置いたら、例えばそういうものを見れるような仕掛けっていうのを作ってあげてもいいと思うんですよ。いつも見れなくてもいいんですけど。

ここの場所へ行けばこういう場所だよっていう。何かそんなのが創れば、結構いろんなポイントポイントがね、今までの遺産以外にも出てくるのかなって気がするんですよ。

(蓮尾)

鮎が大量の登ったことがあるんです。

(後藤)

だからそういうのもね。

今博物館や水族館で流行っているのは、上がるところを見せる。年に何回じゃなく、遡上するところをちょっと見えるようにしたあげるとかね。そういうのを見るとわくわくするでしょう。

それはお金をかけてやる必要はないんだけど、透明のパイプで上がる場所が見れるよ、いつの時期。鮎だったら桜が散る頃に上がってきますから、大体決まれば、そこにぶつかれば見れるわけですよ。

そんな仕掛けがいっぱい出来ると、観察視点としてもいいし、学習の視点としても非常に広がる。

(東)

どういう作りにしてもこの表を作っていくための材料が欲しいんですよ。そのために、特にこの問題点ってのは書きづらいのかなとか思うんですけど。

どうなんですかね。だから現状で。

(後藤)

例えば問題点で言っちゃうと、干潟がね、昔の稜線のような干潟がないっていうのが問題点なわけですよ。

(東)

そうです。あるいは。

(後藤)

そしたら将来像はそういうものを少し補強してあげましょうか。

(東)

そうですね。

(後藤)

そうすると、そこで体験出来ることができてますっていう結論になりますよね。

(東)

そういう話なんですよ。

(後藤)

そうそう。そうすると干潟がないっていうのを言わなきゃいけないんだよね。

(東)

だからそれも一つの問題点ですよ。そういう作業ってやらなきゃいけないのかなって。

(後藤)

でも大体将来像を作るとき、そういうことを想定しながら造ってきているので、もう議論されてるんだよね。

将来像っていうのは、こういう将来像にしたいねというのから発してますから、そういうのは今まで共有してきているので。整理してあげれば。

(東)

むしろ今まではこういうのを造りたいね、こうしたいね、っていう話をずっとしてきたように思うんですけど。

していくために何が問題なの？っていうことを整理しようよっていうところなんですよ。

だからこの②～⑧、あと今日2つ追加されましたけれども、これについて、あるいはこれにとらわれなくてもいいですから、やっぱりこういうところが何か改善しなきゃいけないんだよ、っていうところを挙げていくというところだと思います。

今出てきたのは、人が降りられる干潟がないっていうことですね。降りられると言っていいだろうか。

(後藤)

干潟がないので。

(東)

干潟がないと。

(後藤)

利用を考えれば降りられるところがない。触れ合えるところがない。

(東)

あと何がありますかね。

(後藤)

それからやっぱりさっきの文化的な事から言えば、昔の自然との付き合い方。

それが表現されている場所がない。いくつかはあるんでしょうけど、水田作ったりしてくださってるので。

(東)

かつての人と自然、関わりを示すものがないと。

(風呂田)

基本構造としては、安全にアクセスできる状況の場所が非常に少ない。道にしても今の状況だとヒビ割れだらけで歩けないところもあるし。

だからこう安全性をかなり阻害している部分っていうのがあの構造の中に結構あるんじゃないかと。

それをやっぱり整理しないと。

(東)

そこは結構難しい話でね。

(風呂田)

例えば、水門を今度改修しますよね。

そうすると今の水門構造だとあの橋が一番危ないところだなと。

(東)

そうですね、おっしゃる通りです。

(風呂田)

それはやっぱり最初から考慮して、安全にアクセス出来るようなルートをちゃんと用意するとか、やっぱり最初からやっておかないといけないんじゃないかなと思いますけど。

(東)

項目として書いておきます。安全の確保。

(風呂田)

もっと大きなことと言えば、あそこの現地に行く時の動線として、あの住宅地を抜けていくことだけでいいのかどうか。

(東)

どこの住宅地？

(風呂田)

今の場合ですと、丸浜川のところからずっと行かなくてははいけない。

とても行きにくいですよ、一般的には。

(東)

駐車場からのアクセス？

(風呂田)

駐車場までのアクセス。

分かりにくいって言うか行きにくいって言うか。例えば、むしろそういう機能を極端に言えば、あつちのユニディの方に持っていてしまうとか。そうすると道路沿いですから、比較的アクセスが。

(東)

観察舎へのアクセス。

(風呂田)

人を集めて、ここに来て下さいという時に、今の状況じゃ非常に説明があるので、日常的に人が寄れるにはやっぱり向こう側の方がいいのかな、という面もあると思います。

(東)

住宅地を抜け、住宅地の脇を通るとのことね。駐車場、場所が分かりにくい。

(磯部)

景色を楽しむってのがありますが、視点場のようなものがいくつかあると楽しみやすいですよ。例えば、そこにベンチがあるとかね。

(東)

ありがとうございます。

(磯部)

わりといいところ、環境学習というのは、やっぱりただ見ているだけでも環境の事がわかるわけじゃないから、説明者がいるなり、あるいは説明板。

今でもありますけど、そういうものの充実とかということが入ってくるんじゃないかと思えますけど。たまには説明が出来る人にボランティアで来てもらうって事もありますよね。大学の人間も含めて。

(風呂田)

逆にハードなところだけじゃなくて、磯部先生がおっしゃってるようにボランティア的な活動を、どういう形で支えていくか、あるいは法人としていっていかって、その人材が一番大変なシステムとして必要な部分じゃないかなと思うんですけど。

先ほど林先生から、エコミュージアム、フィールドミュージアムというところで、結局、主体は住民とか学芸員外の方にシフトしていこうと。

そこに持っていくにはかなり誘導出来るような人がいないと、いきなりみんなでは撒いても何も進まない。

多分今の町にしてもなかなか機能しないのは、ハードがあるけどもソフト面での人材がいなかったから、結果的にはもう物で終わってしまっているし。

そこは本当に何もしないでもそういうのが生まれてくわけじゃなくて、積極的にそういう人材を登用するというのをプログラムの中に入れとかなないと、目標は達成できないじゃないかと思えますけど。

(東)

それについては、神奈川県事例を調べてきていただいて、どうも神奈川県では、役所を辞められた

方が色々そういう部分を支えてくださってるような話でしたよね。

こっちはなかなかそういう感じにならない。

(風呂田)

大阪市も自然史博物館なんかだと、もう学芸員が地域の人達と一緒にいつも色んな調査現場を回っていて、その成果をみんなが発表し合っている。

その中の主体にもう官庁そのものが入り込んでるんですよね。

全面に出ていくそういう活動をやっぱ出来るような状況を作っておかないと。

(東)

市川市役所も、どちらかというところそういう方向ですよ。

(風呂田)

それが本来のミュージアムの活動だとは思いますが。

なかなか行政の中にはそういう能力を職業として認めてくれないというのか、どうしてもそこは行政の中だけでは対応出来ない世界なので、どういう形でそういう人達がちゃんとここで仕事出来るようになるかっていうシステム作りは必要だなと思います。

(後藤)

ある意味、文化的なものをお持ちの、昔やってた人達に教わる部分ってあるんでしょうけど、逆に言うところあんまり教わることよりは、一緒にちょっとトライして造ってみようっていう発想のほうが巻き込み型っていうのかな。

例えば、“よしず”を作ってみましょうと。どんな道具がいるか、みんなでもちょっと考えて調べてみれば、昔の行徳のものがあると思うんですよね。

そういうのを真似してちょっと作って、とりあえずやってみようとか。わからなくなったら誰か呼んできて教えてもらおうと。

そういうふうになんか、自分達がそういう場を造ってきたよっていうプロセスを楽しむ部分って、普通の人達って意外と楽しいもので、ただ教わるのじゃなくて、一緒になんか造って行って、そのうち教える立場になっていくとか。

そういう部分があってもいいのかなと、あまり最初から固く完成したというものよりは。

(東)

最初は試しから。あとは何かありませんか。

みんな見てくと人になっちゃうんですよね。

(林)

問題点のところの大部分は人と金みたいな話ですよ。

(蓮尾)

あと時間。

(後藤)

景色を楽しむというところがあったんですけど、僕もよくわからないのは、色々なものが大きくなってきてますよね。トウネズミモチとかハリエンジュ・ニセアカシアなんかも含めてね。あれがいいのか悪いのかわからないんですよ。

よく分からないというのは、外来種だからだめだよってのも言い切れないし、鳥が自然に落として生えてきたものもあって、関係者から言えばそれは駄目なんですよ。

どういう樹木の種類がいいのかどうかよくわからないんですよ。

すぐ歩いているところにも、随分大きくなってきているのもあるじゃないですか。あれは切ったほうがいいのか、切らないほうがいいのかっていうのは、すごく大きな、散歩している人達はどう感じてるのかね。

むしろ実がなって、鳥が食べているからいいというふうに見てるのか、もうちょっと湿地を見たいから邪魔だと思っているのか。

それは全然わかりませんよね。

(東)

あそこの自然を表現しなきゃならない方々の意見がまとまってないんですよ。もう一つは、成り行きでああなっているんですよ。じゃあどういう景観にしたらいいのかっていうのを、どうやって決めてっいたらいいのかっていうのが、まだなんとも。

(後藤)

悩ましいところですよ。

(東)

だから、それをどこかでみんなで議論して決めるのっていうのが。

(後藤)

難しいよね。

(東)

いや、出来るかどうか。

けど、その丸浜川の景観をどうやって作っていくのっていうのは、大きなテーマですね。

(後藤)

丸浜川に関してはそうかも知れないですけど。

(東)

景観をどう作っていくのかと。

(後藤)

もう1つ、葦原っていう、葦が生えてる姿っていうのが本来の姿だと思うんです、ある程度、葦が。それをどういう風に、葦が生えていると要するに見えないところもでてくるし、バッファとしていいところもあるでしょうけど、それをどういうふうと考えていくかっていうのが大きな問題で、どの程度刈っていくかとか、どう利用していくかを含めて。

やっぱり葦原って非常に重要な部分なので。

(東)

極相なんですよ、葦原って。

だから、そういう意味では原生の自然なんですよ。

(後藤)

そうなんですよ。だから、

(東)

葦原。

(後藤)

すごく大事な。

(東)

葦原の、何？表現か。

(後藤)

中側ってというのは自然の状態にしといたらいいですけど、周囲をどういうふうに考えていくか。

(東)

そうですね。

(後藤)

本来はそういうのがあって、獣道があって、干潟に出てくみたいなイメージが正しいイメージかなと僕は思っています。

(東)

ただ、現在の丸浜川に生えている葦原ってというのは水に近いところで、別に目の高さにあるわけじゃないから。

(後藤)

長くはないね、それはそれでいいと。

(東)

特に文句言われたことないんだよね。

むしろ、この葦原をどう表現するのっていうことのほうが大事かもしれないですね。

葦原、あと藪ですね。竹藪なんですよ。

(磯部)

①が東京湾奥の自然を感じる場所っていうことになっていて、利用って側面なんだけど、右側を見てもみると、どのように自然を創るかっていうか、再生するかってことに関わるようなことが多いような気がします。

むしろ、感じる場所って書いたのであれば、例えば、散策をすることによって自然を感じるとか、あるいは鳥の営みを観察するとか。

そういう類のものがここに入らないといけないんじゃないかという気がしますけど。

ここに書いてあるものは、前段階、もっと前の段階の話でどう創るかってことで。

もう一点違う視点ですけど、林先生からご紹介があった博物館は、有形・無形の遺産って言葉だったと思いますけど、この行徳湿地ってというのは、まさに生きた営みがあるところじゃないかと思うんですけども。遺産ではないですね。

そこがやっぱり基本的な違いじゃないかって気がするんですけど。

特に自然だけとは限らないけど、自然の営みってというのはここにあって、それが資源としてまず一番大事な資源で、それを感じるとか、景色を楽しむとか、それがあからボランティア活動するとか、研究活動するとかいうのが出てくるので。

そこはエコミュージアムという定義なのかどうかわかりませんが、少なくとも博物館の定義とは一線を画するところがありそうな気がするんですけど。今の現状ではね。

(林)

ごめんなさいね。

今のところで言うと、遺産って別に死んで残すわけではなくて、今あるものでもいいので、いいんですよ、全然。その点は入ります。

だから、自然があるのままというわけじゃなくて、造る部分があるわけですよ。

(磯部)

遺産ってというのはでも英語でなんて？

(林)

ヘリテージ。(heritage)

(磯部)

あ、ヘリテージ (heritage) だとちょっと意味、遺産と違うんですね。

(林)

そうそう、ごめんなさいね。さっきヘリテージと言えばよかったですよね。ごめんなさい。

ヘリテージなんですよ。

だから生きてるものまで全部入っていいんです。全然問題ないんです。入ってなきゃいけない。

(磯部)

日本語の遺産っていうのは、あまり生きてるものは入れないですよ。

(林)

よくないですね。すいません。

(磯部)

なるほど、そういうこと。

(東)

ヘリテージ (heritage) っていうんですか。ありがとうございます。

(磯部)

その中で、生きているっていうことがこの特徴だと。

(林)

そうですね。

自然そのものを、あるものはなるべく生かし、しかし昔うまくいっていたというのを再現出来るのであれば、再現するのを造るっていう部分がこの場所として、下の色々な事を先生おっしゃった通りの繰り返しですけど、下の色々な事のまずはベースですからね。

ベースだから、それをまず、言い方として最近の流行りで言えば例えば再生するみたいな。再生するという事そのものが大きな目標ですよ。

なるべく色々な、昔あった色々なものが、イレコというか、ごちゃごちゃなって色々なところにチョコチョコあったものでしょうから。

それをなるべく多様なようにうまくゾーニングしながら、再生をすることができればみたいな感じ。再生っていつでも、ほんのちょっと前の再生じゃなくて、かなり昔までを含めた再生だから、ちょっと意味合いが違いますけど、それがヘリテージを創り出すもの。それが全てのベースですよ。

それは⑤という環境再生の取り組みっていう、いわば技術をどうのこうのって話よりも、もう少し違いますよね。

そうではない、そのベースの部分を作るんだっていうとこを今磯部先生がおっしゃった。その通りだと思います。

(後藤)

磯部先生がおっしゃった、今生きているものをまずしっかり大事にしてくっていうのがベースになるよって話だと思うので。

あまりこちょこちょ、この前も箱庭的に造る部分もあってもいいんだけど、広いベースのものはきちんと価値を認めるといふか、きちんと主張しながら壊さないようにやってくっていうのが一番大事だから。

(磯部)

④の環境学習っていうのと⑥の科学的調査っていうのがうまく繋がるといいですね。独立じゃなくて。調査して、色んなことがわかってきて、一緒に学ぶこともあるだろうし、まずは調査をしてわかった事を、環境学習の場に活かしていくようなこともあるでしょうし。

(蓮尾)

風呂田さんが企画されているというか、現実に行われている干潟の学校というのが、まさに両方だと思います。大体何回やってくれるのかなあと、ちょっと後で。

(風呂田)

早く言って下さい。大体大潮にみんな合致する。みんな一緒になっちゃうんで。あっちゃこっちゃまだ考えながら。

(東)

そうですね、これはもう一度整理のしようがあるかもしれないですね。例えば、④と⑥はくっつけちゃうとかね。

(磯部)

でもまあ、こうやっておいて、お互いに関係についてやりましょうと。

(林)

最後にでた、自然と人間の係りなり、文化的な話が、④の環境学習と離れるはずがないんですよ。だけど、一緒にしてごちゃごちゃにしちゃうと、議論もぐちゃぐちゃになっちゃうから、整理の段階はまず別途としてやって。

(東)

分けておいたほうがいいですね。わかりました。

(林)

説明とかの時に、これとこれがこうなってっていうと、厚みが一気に増すと思うんですよね。バラバラになっているより。

(風呂田)

全体的に、この中に対して情報発信のシステムを作っておかないと。

(林)

僕も情報発信を今ちょっとメモしてたところです。

(風呂田)

そこは色々やろうとしているんだけど、やったことがどういう形で社会に伝わっていくかっていう、その仕掛けも絶対必要になってくるので。

例えば、科学的調査をしてもいいし、環境学習の場として使ってもいいけど、そこで得たものは何であるかと。

情報をやっぱり積極的に出す人も一緒に出していかないと。面白くないというか、質が上がらない。

(東)

おっしゃる通りです。情報発信という言葉だけでいいんですかね。

(風呂田)

どういう形のものかはなかなか難しいにしても、そのシステムを作っておかないと、またやったけど何も残らない。

歴史になっていかない。

(林)

そんなにエコミュージアムにこだわり過ぎてるつもりはないんですけど、ミュージアムであるからには博物館なんですよ。博物館であるからには、当然にそういう蓄積はされるべきものなんですよ。そこが、やっぱりすごく大事なところで、イベントがただ繋がってるだけではないっていうところが博物館。情報がたまっていく。

専門家がどこまでいるかっていうのは色々でしょうけど、それなりに、少なくとも相談にのってくれる人はいるということには必ずなると思うんですけど。

蓄積されるのはすごく大事ですね。

(東)

蓄積だけじゃなくて、整理されてないと。

(林)

その通りですよ。

標本はあればいいというものじゃないですよ。名前付いてないととか、あるいは少なくとも分類されてないと使えないです。その通りです。

情報発信、web ページだとか、ソーシャルネットワークだとかすぐ出てきますけど。

(磯部)

環境学習というところでは、初心者から上級者まで何かあるといいかも知れませんね。

(林)

プログラムの対応性ですよ。プログラムをどう蓄積するかというところ。

(磯部)

それは、問題点として、そんなのやりきれないという問題点が出てきてもいいんですけど。

ただ、特にここにいる人達は、自然にすごく興味を持っている人だから知識も多いし、色んなことがわかるんですけど、ただ普通に来る人ってそんなにわかっているわけじゃないので。

そういう人と良くわかっている人とは、おのずと求めるものが違うと思うんですよ。

特に初心者に対して、うまい誘導が出来るってだんだん入ってくるというところがあるんじゃないかと思うんですけど。

子供でいうと、やはり、例えば鳥でいえば休息しているよりは採餌しているほうが楽しいですよ。その説明があるとそれに食いついてきて、そこから入ることがありますよね。それが初心者に対する対応の一つ仕方ですよ。

そういう意味で初心者と上級者の違いで、というのがあるとすごくいいなとは思いますが。

(東)

目で見てわかると。

(後藤)

④の環境学習っていう言葉を、体験も含めた意味で書いておいてもらいたい話をしたと思うんですけど。

環境学習っていうとどっちかというとお勉強っぽいので、体験も含めた。

(東)

体験を主体としたほうがいいんじゃないですかね。

(後藤)

環境・体験学習っていう言葉を、中ポチ入れてよく使うんですけど、どうも環境学習だけだと。

最後どちらでもいいんですけど。もうちょっと体験に重点をおいたもののほうがその後面白いのかなという気が。

(東)

そこの売りは多分そうでしょう。

(後藤)

多分ね。

(東)

ありがとうございます。素晴らしいですね。どんどん気が付いたことを色々教えて下さい。

これはどうですか。国内外の団体施設との交流というので、どんなイメージで、どんな。

これは何もご意見がないんですけど。

宿泊施設があったほうがいいんだろうね。言い過ぎですかね。

(風呂田)

システム作ってパッといくようなものじゃないんで。

(後藤)

今、浦安の郷土博物館なんかとは、直接は何かあるんですか。

(東)

観察会のお手伝いをしているくらい。

(後藤)

東さんが。鳥の観察会ですよ。浦安の郷土博物館との関係っていうと。

(会場)

郷土博さんとは、丸浜川沿いに生えている竹をちょっと。折々提供して。

(後藤)

なるほど。

(会場)

文化的な交流を。

(会場)

七夕だったり、正月飾り。

(林)

十分な交流じゃないですか。材料を手に入れるってどこでも一番肝心なことですよ。

やりたいと思っても近場で材料を手に入れること出来ないんだもん。

(後藤)

色々藁もお世話になってるし。糶摺り器もお世話になっているので。

(林)

すごい大事ですよ。

(風呂田)

また船を作って、木造船を作ってもらって。

(後藤)

そう、べかぶねを一本。

(林)

いや、僕も船って書いたんですよ。船ってやっぱりべかぶねだったんですか。

(風呂田)

この辺はそうです。

(後藤)

べかと、あとは打瀬か大きな船。

(林)

打瀬もあったのか。

(東)

これは何か出来るかも知れないですね。

今の郷土博のあそこのプールみないところじゃなくて、奥で何か出来るかも知れないな。

(後藤)

僕なんかもフィールドのほうで浦安のほうに作りたいと思っ

ただものすごく充実した博物館だから、あれに場所ができれば。そういう意味ではいいかも知れないですね。

(東)

何かできるかも知れないですね。

(後藤)

少し向こうの。

(林)

職人さんは「絶滅寸前」みたいですね。

(後藤)

そう、絶滅。それもそうなんだけどね。

(林)

そんな言い方したら失礼だけど、本当に最後の何人かみたいな話になってきているようなので。

(後藤)

その辺少し交流も含めて、将来像ができた時に、こんな事を行徳でやりたいんですけど手伝って下さいと言え

いと言え、結構あるかも知れないし。

(東)

郷土博、船、保護区か。

(林)

浦安だと、定年くらいの方に活動に加わりませんかと声をかけると、「わたしのよ

うな若造ではまだまだ」と返事が返ってくるという話もあります。70代、80代の方がお元気なんです。もう10年か20年はこの調子で、それから代替わりかもしれません。

(東)

国内外の団体施設との交流っていうのは何か。

(磯部)

博物館とか美術館に行くと、必ず自分のところじゃない、どここの美術館で今、〇〇展をや

ってま

すとかって宣伝してると思うんですけど。

それとか、お城を見に行くと必ず上にお城の写真がずらっ

とかけてあって、姫路城に行くと、実は上田城もありますとか、〇〇城、日本の26城がありますとか。

つまりお互いに紹介し合うのも連携の1つかも知れない。

(後藤)

そうだよ。市川もそうだけど自然博と両方飾ってあってもいいよね。

(東)

確かに大町はないなあ。

(後藤)

大町と両方飾ってあってもいいよね。そうすると特徴がでるでしょ、説明しようとする。

向うで飾ってもらうのは、行徳湿地はこうですよ。向こうは向こうで考えて。

それだけでもやればね。浦安郷土博物館にも飾っておいてもらえれば。

(東)

大町、谷津、葛西ってあるんだからね。あと東京港か。

(後藤)

東京港もあるしね。

(東)

他にもあるかも知れない。

(後藤)

葛西もあるしね。

(林)

水族館には知り合いがいますから。いくらでもいくらでも。

(東)

ありがとうございます。

(後藤)

その辺でいいかも知れないね。

(東)

ありがとうございます。

もっと国際的な視点に出すとどうなんですか。

(蓮尾)

昔は、うちからは人を出したから、よそから来られた時に宿泊だけは無料で出来るってことがやればなと思っていました。昔は。今はそれどころじゃないです。

(後藤)

この前、風呂田先生がきて説明してくださったのありましたよね。

どこでしたっけ。韓国？

(東)

宿泊施設っていうのは、やっぱり書きちゃっていいのかしらね。

(風呂田)

いや、難しいなあ。

(東)

海外交流の為の宿泊施設。

そんな立派なホテルを建てるって話じゃなくて。

(蓮尾)

今ある管理人棟を活用したらどうかっていうようなことですよ。

(東)

そんな規模なものでもあれば、何か活用できないのかなという。

(蓮尾)

釧路の国際ウェットランドセンターかな。

そこで3回程、発展途上国ということですけども、各国の干潟とか湿地のお役人だったり、専門の研究者だったり、そういう方達を団体で、日本の北から南まで1ヶ月ぐらいかけてずっとご案内する。その一端をうちにこられてやってらしたんですよね。

鳥関係で、日本でいいからやらないかといっても、儲からないから駄目だと旅行会社の人に言われました。あまり沢山お金とれないし。

(東)

宿泊はカッコ書きで入れておきます。

そんな大規模なものじゃなくて、ちょっとっていうぐらいのものがあればだいぶ違うのかなって。

(磯部)

グレードを落とすと、安い宿泊所を紹介してあげるっていうのがありますけど。

大学なんかでも寮が足りないときは、安いところを紹介してあげますよっていうのは、それはそれなりに外国の人は情報がないですから喜ばれます。

(林)

東京の穴場なんていくらでもありますからね。地元であればわかる話で。

(風呂田)

それは連携の問題で、企業連携の一部だと思うんですけど、そういうサポーター的な宿泊施設を持っている人達を作っていくという。

高級なとこだったらホテルニューオータニでもいいし、その辺のビジネスホテルもピンからキリでいいと思うんですけど。

(東)

わかりました。

(磯部)

なかなかやっぱり自分で維持管理するっていうのは、やりきれないところがあります。

(東)

おっしゃる通りですね。わかりました。

あと、交際交流というか国内外の団体施設との交流ということ。なかなかない？

(風呂田)

どの辺まで動いたかわからないけど、成田空港の近くの里山を、成田空港のお客さん向けに案内するような仕掛けしてますよね、今ね。あれがどう動いているか僕も知らないんですけど。

やっぱりそうなってくると、具体的に来ている人達に対して情報提供してサービスをするというシステムがまずあってもいいのかなと思うんですけども。

成田空港の里山で動いていることがうまくいっているのであれば、そこでもちゃんと色んな話をこちらから持ちかけていって、情報を出してもらおうというのがありますよというふうな。

結構、里山という切り口では色んなとこが動いているんじゃないかなと思いますけど。

むしろ海よりも先行事例としては沢山あるので。構想も含めて。

ですからあたってみてもどうかと思いますけど。

(蓮尾)

それだけ危機感も強いと思います。

(東)

里山。

(風呂田)

一種の今流行りの言葉で“さとうみ”ですよね。行徳全体が。

(東)

里山紹介活動の調査というか。

(風呂田)

ちょっと情報収集。人的なものも含めて。

(東)

情報収集と。例えば成田と。

(磯部)

大学で国際的な連携というと、交流協定を結ぶってというのがすぐ出てくるんですけど。

(林)

ありますね。

(風呂田)

協定は結ぶんだけど、何をやるかとなると、なかなかこう。

(磯部)

大学の場合は学生を交換しましょうとか、それから研究者が行った時に、それなりのサービスをしてくれますよというのがありますから。規模が色々ありますけど。

鳥でいけば台湾の“チークー”って言うんですけど。 “クロツラヘラサギ”。

(東)

一番南の。

(磯部)

そこなんか観光バスがぞろぞろと大挙していく。

(林)

そういう話でしたね。あれは驚いちゃいましたよね。

(磯部)

そういうところと交流協定でもできれば、お客さんがすごい増えそうな気がします。

(東)

伝手はありますね。

(磯部)

鳥が移動する経路にそって交流協定を結ぶっていうのもあるかも知れませんがね。

お互いにどんな鳥が来ましたよって情報交換をしましょうっていうのがあるかも知れない。

やろうとすると段々大変になって大変ですけど。

(東)

優先順位っていうのもあるでしょうし、こういうのに長けた方いらっしやるとバツと進むでしょうし。ありがとうございます。

もう一度見てみて、何か気が付いたことがあれば。

(風呂田)

連携になるんでしょうけど、企業のサポートを得るためにはどうしたらいいかという。

(東)

そのきっかけに実はしたいんですけどね、青年会議所というのは。

(風呂田)

例えば、船を作るのであっても、この船を作るにあたってはこういう企業から援助をもらってますというのは、企業にとっても今の社会だとCSRですか。

そういう活動の場としても使ってもらえるような運営の仕方を考えていいんじゃないかと。

(東)

それはおっしゃる通りです。

(風呂田)

例えば、観察施設、東屋一戸建てるんであっても、ここはどこからの企業の援助がありますとか。

そういうところを評価していけばお互いに連携も生まれてくると思いますので。

(東)

また、もとに戻ってみて、もう一回整理する必要があると思うんですけども、気が付いたことがあったら是非教えて下さい。

(後藤)

カメラマンが多いですよ。すごいですよね。

(蓮尾)

観察隊の手引きを作るにあたって、手持ちじゃない写真をカメラの方に有償で提供していただこうと思っております。

(後藤)

前に写真展みたいのやってたけど、結構。

(東)

会場みなさんに伺いたいですね。

参考資料1-4の縦2の『利用を図る上での特徴的な機能の“目標達成のための施策”及び“問題点”と“対応策”の検討』。これでワーッと読んだところで気が付いたところを、委員の先生方に指摘していただきました。

是非、皆様からのご指摘、あるいはご意見を頂けるとありがたいです。これに追加しなければならない項目として今上がっているのが

- ・国内外の団体施設との交流
- ・自然との関わりを示す文化面の表現

この2つの項目が出てます。

皆様、是非今のやりとり及びここに書かれていることですね、見て気が付いたこと、あるいはご意見、そういったものがあれば是非お願いします。

(会場)

実は私、浦安の博物館、もやいの会に一年ぐらい会社辞めてからいたんですけど、こちらにもお世話になったことあるんですけど、行徳で数年間ですね。

浦安の場合なくなっちゃってますんで、漁業ですね。ということなんですけど、こちらには漁業があるということで、直接は行徳の湿地とは関係ないわけなんですけど、先程、船という話が出まして、やっ

ばり行徳の場合は過去の産業というのは塩、“塩田”だろうと。

浦安と船橋はどちらかというと海苔・あさりといういわゆる魚介ですね。この場合はそういう意味では、塩田に関わる文化的な過去の歴史があるんです。

そういうものの保全というか蓄積というか、新たに振り返って、昔のあれを取り出してやると。

浦安は手で海苔すきをやっているわけですね。一生懸命あさりのご飯を作ったり。婦人会のおばさん方が。

それをどう引き継ぐかという話が持続可能っていう博物館のテーマになっていると思うんですけど。人がいなくなってきましたから。剥けるおばさんもいなくなってくる。海苔すきを人もいなくなってくる。我々みたいな素人が行って時々やっているわけです。ペったりくつついて。

そういう意味では“塩田”のことについて、行徳湿地の場合はベースにあるのではないのかという感じがするんですけど、その辺は文化という点ではいかがかと。保全されるというね。

(東)

塩田というよりは塩づくりといったほうがいいかも知れませんね。

(会場)

時々小規模でやったりされとるんですけどね。

(東)

ありがとうございます。

ここは森川さん、“蓮”っていうのも入れないといけないんですかね。

(森川)

水田よりは蓮のほうが、どちらかというと利用できるのかな。

(東)

よく考えると蓮っていうとこのほうが。

他に何かここで加えるようなことってありますか。

森川さん、自然との係りを示す文化面の表現みたいなところで。

(森川)

今、会場から言われたように塩づくり、漁業は確かに船橋、浦安さんが漁業で、その間を行徳は塩づくりをやっていたと。それが明治後半ぐらいに漁業も入ったという。

状況からいきますと1つの文化としては塩づくりというのは欠かせない文化かなとは思いますが。

そういう意味で、会場の意見も参考に是非していただければと思います。

(東)

ありがとうございます。

他にどうでしょう。何か気が付いたこととか、ご意見とか、もっとこういう事を書けとかいうのがあるとうれいんですけど。

(会場)

ずっと拝聴していただいてですね、正直ますます混乱してしまっただけです。

機能とか色々な人達に利用していただく場所のイメージっていうのは、今は立ち入りが規制されている保護区の中でやるっていうイメージなのかなと。

もしそうであるとする、今は案内人とかをつけてご案内をしているような感じなわけですけども、もっと色々な条件、つまり、友の会メンバー以外の色々な人達が、色々な資格って言ったら変ですけども、許可をとって中で活動するというような形になっていくのかなというような、全体を拝見し

てると受け取れるわけなんですよ。

私の意見ですけども、しょっちゅう色んな人が出入りして、野鳥だとかあまり安住できないようなところになってしまうというのは、行徳の鳥獣保護区として、保護区である意味として、正しいのかなというのを聞いていて一番感じてしまったところであります。

大変失礼いたしました。

(東)

貴重なご意見ありがとうございます。

それが基になるのが参考資料1-3だと思います。

『保全ゾーン』と『触れ合い・体験ゾーン』というのを一応分けてあって、あとは、検討を進めていく中で環境教育とかそういったことについては、もうちょっと広くみるのかも知れないし、その場合どういう形態がいいのかということは、やっぱり議論していくことだと思います。

他にはいかがでしょう。

(会場)

1-5に航空写真が載ってますけれども、この上で市川市が掲示学習施設というのを1haで絵を描いてるんですけども、それとの関連を検討する場があってもいいのかなという、そんなことを感じました。

すぐ上というか、道路があって、その先に鉄道があって、その先に市川の所有地があって、所有地の先を市川市が絵を描いてるんですけど。

(東)

この写真でいうと、上のほうの切れちゃったところですね。空き地になってる。

(会場)

切れた上のところに、絵を描いているので、その絵との関連を検討する場があってもいいのかなという感じがしました。

(東)

はい、ありがとうございます。三番瀬施設か。関連を。他には何かありますか。大丈夫ですか。

(後藤)

1点だけいいですか。

1-3の参考資料で駐車場がありますね。行徳野鳥観察舎駐車場から黄色のラインは、あれ何ですか、この前も聞いたと思うんですけど、行徳湿地に入ってくる場所までの、この川の柵の中側はどこが管理してるんですか。これは県？

(森川)

河川？道路？

(後藤)

道路と川。

(事務局)

水路ですね。

(後藤)

水路？柵があって、丸浜川自体っていうか、ちょっと土手みたいになってますよね、柵の下が。あそこはどこが管理してるんですか。

(事務局)

あそこは市川市の管理です。

(後藤)

市川市ですか。わかりました。

(森川)

河川のほうで所管してるそうです。

(後藤)

そうですか。

(東)

上が？

(市川市)

道路の部分、人が歩く部分は公園課で管理しております。

(後藤)

公園課。土手みたいな、丸浜川自体は？

(市川市)

あれは河川下水道管理課っていう、本当は行徳湿地が大水にならないような暫定的というか、本来はどぶ池というか湊排水機場に行くんですけど、大雨が降ってそこで許容できない場合にはあそこから東京湾に流すんです。

(後藤)

そうすると、市川市が管理している形になるんですね。

(市川市)

欠真間水門のちょっと手前までは市川で、その先は国になります。

(東)

河川下水道課？

(市川市)

河川下水道管理課。

(東)

ありがとうございます。

(後藤)

たとえば、柵の所の土手を使いたいって話になると、市川市にお願いすればいいんですかね。

(森川)

そうですね。

(市川市)

一部協定を結んで、やってる人もいますけど。

(後藤)

協定を結んで。そういう形ですね、わかりました。前から気になっている場所で。入口としても非常にいいとこかなという。目に見えるんで。散歩している人にも。

(東)

もっと色々な意見を頂きたいんですけど、大体出尽くしてるんですかね。どうでしょう。いつどうやってまとめるかなんですけど。どっちにしても、どうするのがいいですかね。

事務局でまとめてというのもなんか申し訳ない感じで。

(事務局)

今の頂いたご意見で、次回予定しているワーキングまでにこの1-4を埋めようと思います。

(東)

わかりました。ありがとうございます。

(事務局)

貴重なご意見頂いてますので、こちらのほうで埋めて、次回のワーキングでもう一度再度皆様にご確認頂いて、その上で今年度の協議会に諮ろうかなと。そうしないと平成26年までには終わらない。

(東)

もちろんそうなんですけど、出来ればまとめたものを先に頂いて、とても微妙な内容になっていると思うので、ワーキングの資料として出される前に、一度見られる人は見て意見を交換したほうがいいのかなと。

(事務局)

次回のワーキングの前に議事録と一緒に、こちらを付けたものをお渡しできるように頑張ります。

(東)

お願いします。それがあるとだいぶ格好になるかなと思います。

(事務局)

そこでまた各委員の方々から、ここがこうじゃないかという風なご指摘を頂いた上で、次回のワーキングまでに修正するようにします。

(東)

はい、ありがとうございます。では是非それをお願い致します。

何かそれがために、今まだここだけ確認しておきたいことがあれば、事務局でどうですか。大丈夫ですか。

また、だからこれがよくわからなかったという話があれば、是非記憶の限り色々話をしたいと思っています。

(事務局)

協議会の時には、こちらの(参考資料1-3)素案の“素”は取れる様な形に持っていきたいと思っていますので、こちらのほうも、次回ワーキングの時までに、議事録をお渡しする時に、こちらのほうもこれでどうでしょうかというふうなものも。

(東)

そうですね。

特にこれについては皆様のご意見聞いてなかったんですけど、だから素案の“素”をとりたいたるところです。

(風呂田)

まだ議論してなかったんですけど、基本的にはできるだけ立ち入り禁止ゾーンは減らしたほうがいいと思うんですよ。というのは社会的な財産ですから。

ただ実際エコミュージアムの機能を維持するため、あるいは野鳥を保護するためには、例えば一番厳しいところは絶対、基本的に一般の人は立ち入り禁止、次にはガイド付きじゃなきゃ駄目、その次にはある決められた区域は自由に行ける。そういうゾーニングをやっぱり考えなければいけない。

むしろ制限することの理由を説明できるようなゾーニングをしたほうがいいかと思うんですけども。

まあ、脆性ってことももちろんその中に入ってきますけど。

やっぱり、いかに自分達で行って、触れ合い的な体験ゾーンがこの中にどれだけ設定できるかというのが、かなり機能に効いてくるんじゃないかなと。1から10まで誰かがついてやるというのは結構大変な作業になってくるので。

現状のところで、高校水門ですけど、今現在ほとんどなかなか使えないような状況になっているので、やはり、淡水池から右側ですか、ウラギク湿地周辺っていうのはもう少し自由に立ち入れるような仕掛けをしていかなきゃいけないのかと思っていますけど。

一番、子供達にしろ、体験的な感動っていうのは、トビハゼだとか、わさわさのカニとか、ああいうものをワーッと見るときの反応みたいなのが、保護区に対する魅力の出発点かなと思います。ここは出来るだけでもちょっと自由に立ち入れるような工夫をしてもいいんじゃないかなと、私は思っています。

(東)

触れ合いっていう意味では、丸浜川をどう活用できるのっていうのが、大きな課題だと思うんですけどね。だから、後藤さんがおっしゃったようなものの、色々な部分がここに入れられるのかな。

塩田は無理かも知れないけど、蓮田とか水田とかって出来ないのかなっていうところはありますよね。それから水位差は結構ありますから、水のコントロールをどうやってるんだっていうのは、ここで表現できるかもしれないですよ。

昔の知見のある方がいらっしゃれば、何か出来るのかも知れないですしね。

(後藤)

僕は基本的にやっぱり保護区内は、風呂田さんのご意見もあるんですけど、できるだけ頻度を高めないようにする必要もあると思うんですよ。

さっき言った場所を気にかけていたかというところ、ここからずっと丸浜川と高校前の干潟の『触れ合い・体験ゾーン（仮称）』のところ、ある程度の大きさが持てれば、その中でやれることって相当あって、そこが整備されれば、そこで表現しながら一時期は本物の体験の中でやりましょうっていう形が一番ベストだとは思いますが、組合せとして。その辺がここでうまく表現できれば。

最初から中で作るっていうのは難しいですから、ここでどういうふうに作っていくかっていうのも含めて、出来上がってくれば良いなとは思ってるんですよ。目立つところだし。

(東)

そうですね。

次回概念図の素案の“素”をとるのに、このままとっちゃっていいのとか、今、風呂田さんがおっしゃった、制限する理由っていうのが合理的に説明できるのっていうところですよ。

これが課題なのかもしれないし。どうしたものやらというところがあります。

議題2 協議会の開催日程について

(東)

事務局から協議会の日程設定として3月11日の週で調整したいとのこと。

2月の25日の週にはワーキングを、3月の11日の週に協議会をという事務局からのご提案です。

(後藤)

2月は皆さん大丈夫なんですか。3月のほうが。

(東)

3月から昼間潮が引くんですよ。

(風呂田)

具体的にいうと、何日から何日の間で。

(東)

ワーキングは2月の19日～28日の間。協議会は3月の11日～15日の間って感じなんですかね。あとは、皆さんのご都合あると思います。会長とか、皆さんのご都合あると思いますから、調整お願いします。

(事務局)

今現在で、協議会の日程で、3月11日の週でこの日は駄目ですっていう日はございますか。

(林)

昼間だとすると、私は15日はダメです。

(東)

多分、午後1時半とか2時からになるでしょう。

(林)

ごめんなさい。そうすると、14・15日が駄目なので、私は11日～13日だとすごくありがたいです。

(事務局)

協議会の開催の予定ですが、午後1時半から千葉市の会場を予定しております。

大体、2時間から3時間ぐらいで考えております。

(磯部)

11・13・15日は大丈夫です。

(東)

私はまだここまでの予定は決まってないです。日程の件は大丈夫ですか。

ここで私は事務局にお返ししていいですかね。

(磯部)

ワーキングは今決めちゃいけないんですか。

(東)

いいですよ。やっちゃいましょう。2月の19～28日の間。

(林)

19日でもいいんじゃないですか。

(後藤)

19日でもいいんじゃないですかね。僕も19日だったら。

(東)

19日。事務局大丈夫ですか。ご都合は19日。

(事務局)

19日、大丈夫です。事務局は大丈夫です。

(東)

もう少し後のほうがありがたいけど、いいですよ19日で。それで決定でいいですか。

(後藤)

蓮尾さん大丈夫？

(蓮尾)

大丈夫です。

(磯部)

同じ時間ですね。

(事務局)

同じぐらいの時間です。この日に決定でよろしいでしょうか。2月の19日の火曜日に。

(風呂田)

18時からですね。

(東)

はい。ありがとうございます。

拙い進行におつきあい頂きましてありがとうございました。

(蓮尾)

よろしいですか。

千葉県の方に、ごく手短かに簡単で結構だと思うんですけども、震災復旧の工事の絡みでご存じのことだけお教え頂ければ。私どももちょっと聞いてますけども。

(事務局)

今日、ワーキンググループありますのでどういう状況かというのを確認したところ、友の会の蓮尾さんと一緒に、震災で復旧する箇所についてどういうふうな復旧がいいとか設計方法を打合せしていると伺っております。年度内に工事を発注して契約するというふうな話を聞いております。

(蓮尾)

一応、先日、震災復旧の工事であるからして、あくまでも現状復帰が原則であって、例えば管理用の通路がヒビ割れちゃんたけどそれを直すとか、そういうことまでは出来ませんよと。新浄化池の中の、そのやり直しということになりますということでは言われました。

一応、友の会スタッフ側からお話しをしたのは、全体で土の量が現状復帰を厳密にやると足りないというお話で。

そうしたらば、むしろ高さを、今の浄化池っていうのは斜面を作っておりますが、高さをむしろ低い、傾斜が緩やかにして頂いたほうがこちらとしては助かる。そのほうが水の動きがゆっくりできるんじゃないかというようなお話をいたしました。

それについて、また図面をひいたものを持ってきて、打合せをするということになっております。あとは、やはり新浄化池に関しては、一旦ほとんど全部土の表面については動かすような感じだと伺っています。

それについては、例えばどうしてもここの植生をとっておかなきゃいけないとか、そういったことについて、植物の方とか管理をやってる方のご意見を伺うということでは今やっています。今度の土曜日に主だった方が来られますので、その時に伺うと。

ですから、私どもがかなり強く希望してました、水源地であるポンプの改良とか、そういったところは残念ながら現状復帰とは違うことなのでダメですよと言われて、ちょっとがっかりというか、しゅんとしているとこですね。せつかくお金が出るのにといいながら。

今のところ、3月にとにかく入札ないし発注なり、とにかく今年度中にそこまではやると。見当としては5月か6月ぐらいまでに工事を行うというふうに伺ってしまして、それが終われば今現在全く機能していない“水車池”と呼んでいる水源の池は、復活するという予定でございます。

(東)

ありがとうございました。すいません、お願いします。

(事務局)

本日はお忙しい中ありがとうございました。

日程まで決めて頂きまして非常に助かりますので。それでは、その他どなたか、また会場の方でも何かございますでしょうか。よろしいですか。

それでは第 14 回行徳湿地再整備に係るワーキンググループを終了いたします。ありがとうございました。

(委員)

ありがとうございました。お疲れ様でした。